

大学連合ハワイ宿舍の運用を終えて

天文学教育研究大学連合（以下大学連合）は1998年6月に、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学の天文学関連専攻によって設立された研究者の任意団体です。設立の目的は、「わが国の天文学の将来をになう優秀な若手研究者の育成をはかるため、大学における萌芽的、機動的な観測研究の立ち上げとそれを支える研究基盤を強化する活動を支援し、主として大型装置を全国共同利用の形で運営する国立天文台と相補的な立場で天文学の発展をはかる」ことにあります。

設立後まもなく、多くの大学院生が参加する、すばる望遠鏡の観測装置の立ち上げが本格化し、ハワイに赴く大学院生の数が増加しはじめました。これを受けて1999年1月に大学連合は、天文学振興財団の資金援助を受けて、これらの大学院生の支援を主目的とした宿泊施設をハワイ島ヒロ市に借りました。安価な宿泊施設として運用してきましたが、2002年3月をもってその運用を終えました。大学連合の1、2期運営委員長兼事務局長として、ここに3年あまりにわたった運用のご報告をいたします。

最初に借上げたのは、埼玉県にある私立高校が、生徒の「ハワイ短期留学」のために所有しているアパートの一室でした。この部屋はさらにその内部が、居間、台所及びシャワー設備を共有する二つの寝室からなっていました。一つの寝室には二つベッドがあり、最大4名の宿泊が可能でしたが、寝室は2名泊まるとかなりの圧迫感が感じられる程度の広さしかありませんでした。大学連合が運用するといっても、部屋の鍵の受け渡しや家賃を含め諸々の経費の支払いなど、現地にいる人でなければできないこともたくさんあります。ハワイ観測所の海部所長のご配慮により、関口和寛さんと遠藤万里さんにそれを引き受けていただくことができました。

この部屋の利用者は予想以上に多く、当初の10ヶ月間の平均は1日あたり1.8人にも達しました。利用者が多くなるとその狭さは少し気になってきました。しかし最大の問題は、男女が共用できない部屋の構造になっていることでした。観測装置の開発には女子学生も何人か関与していたからです。そこで私は2000年1月の契約更新の時に、女子学生用に、寝室一つの部屋をもう一部屋借り上げる予定で話を進めていました。ほとんど話がまとまりかけていた矢先に、思いがけない事態が起きました。高校が「ハワイ短期留学」の活動を来年度から強化するので、よそに部屋を貸す余裕がなくなったといってきたのです。もう一部屋借りるところか、今いる部屋からも出てゆかなければならない羽目になったのです。

利用者が予想以上だったことを受け、今度はアパートではなく収容力の大きい一戸建ての借家を探すことにしました。家探しはハワイ観測所庶務掛の池本誠也さんにお世話になりました。候補になりそうな家を探して、デジカメで内部外部の詳細な写真を撮りメールに添付して送って下さいました。その結果見つかったのが、通りの名前をとって我々が「Iwalani House」と呼んだ家でした。これは二階建てで、寝室が5室、広い居間、2箇所のバス、3箇所のトイレなどを有し、9人まで宿泊できるすばらしい家でした。女子学生の利用も問題ありませんでした。しかしさすがに、一戸建ての家を借りて、家具の全くないところから多くの人が住めるようにすることは、私一人の手には負えなくなりました。安藤所長にお願いして、ハワイ観測所の方の手助けをお願いすることになりました。そもそも家の契約書にサインしていただいたのも安藤所長でした。2000年3月はじめにヒロに行った私は、ベッドと寝具8セット、ソファやダイニングテーブルなど、まさにホテルが開業できるほ

か」と言われたのです。「そんなはずでは、」といっても仕方ありません。再び家探しとなりました。またまた観測所のみなさんにお世話になったの言うまでもありませんが、今度は簡単には見つかりませんでした。そんな折も折り、2000年11月1～2日にかけて、ヒロは、雨には慣れっこのヒロ市民も驚くほどの大豪雨に見舞われ、Iwalani Houseの一階が床上浸水してしまったのです。24時間の降水量が700mm以上に達したと言うことで、ヒロ全域で土



写真1 Likeke Houseの外観

砂崩れや多数の浸水が発生しました。宿泊していた東大大学院生の田窪君と酒向君はとりあえず林正彦さんのお宅に避難しました。被災からの復旧は11月下旬には終わりましたが、新しい家は見つかりません。林左絵子さんの発案で、メールを通じて、ハワイのすばる以外の天文台で働いている日本の若いポストドクの人たちにも情報をお願いしました。被災を期にこの事業をやめることも視野に入れましたが、最終的には、3月まで引っ越し期限を延ばしてもらって、滑り込みで新しい家に引っ越したのです。

最後の家である Likeke House (写真1) への引っ越しは、観測所の並川和人さん運転のトラックを先頭に、本原顕太郎さんに世話役を頼んで組織していただいた、多数の所員や奥様方の強力なチームの助けのおかげで、私が Supreme-Cam の試験観測の後下山した翌日の1日間で終了しました。その夜は林邸で、皆さんの慰労のために打ち上げが行われました。この家も Iwalani House に劣らず、広すぎるくらいの居間と寝室4部屋を有する立派なものでした。大学連合としての運用は終わりましたが、2002年4月からこの家の運用は、国立天

どの買い物をしました。あのウォルマートでさえ、出口を出るたびに「レシートを検査させてくれ」と言われたほどです。しかし、観測所の Tomoko Fuselier さんの適切な案内と官用車を使わせていただいたおかげで、わずか2日間で買い物と搬入をすませることができたのです。アパート時代とは違って、電気、電話、水道はもとより、部屋の清掃やシーツなどの洗濯、ゴミ処理、芝生の手入れまですべて自前でやらなければならなくなりました。これらの問題の解決には池本さんはじめ観測所の方々に大変お世話になりました。

表1 大学連合ハワイ宿舎利用者数

Kunori Apartment	1999年1月～2000年2月	774人日
Iwalani House	2000年3月～2001年2月	1187人日
Likeke House	2001年3月～2002年3月	833人日
総計		2794人日

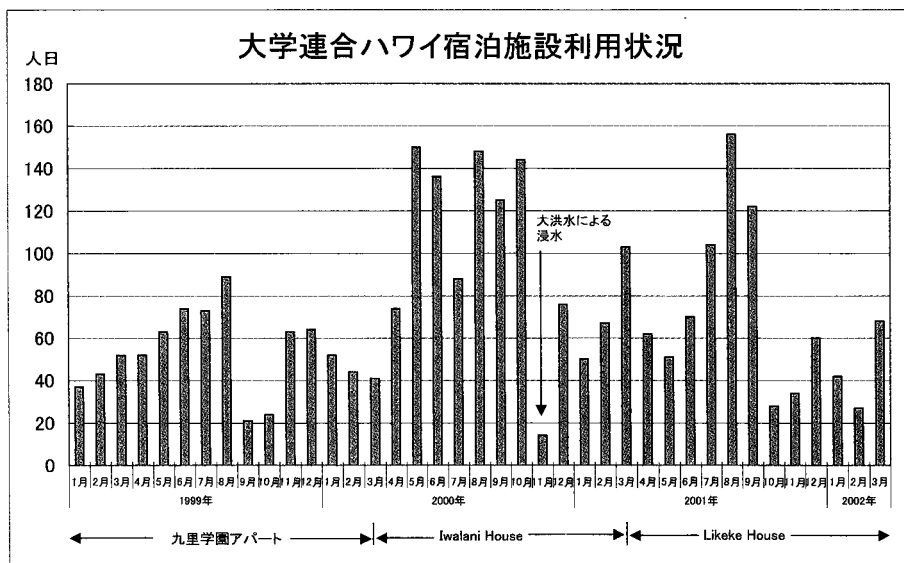


図1 大学連合ハワイ宿舎利用者数の推移

文台関係者で組織する「ヒロ研究生活支援委員会」に引き継がれています。

表1に大学連合ハワイ宿舎の利用実績が示されています。3年2ヶ月の間に2800人日近い宿泊を受け入れたことがわかります。運用の終了に伴って、大学院生の一人から次のようなメッセージをもらいました。「大学連合宿舎に大変お世話になった私の感想です。観測所からもどった後、同じ世代、もしくは先輩方とゆっくりと話が出来た大学連合宿舎は、私にとって非常に有益な場所であり有益な時間でした。これからハワイを訪れる方々にも同じ体験をしていただけたらと思います。大学連合宿舎のような宿泊施設の継続運用がこれ

からも行われることを願っております。」若い学生さん達のハワイでの生活になにがしかの貢献ができたとすれば大変嬉しいことです。また図1には、月ごとの利用者数の推移が示されています。すばるの観測装置立ち上げと試験観測の推移を示す一つの記録です。

最後にこの場を借りて、資金援助をいただいた天文学振興財団、様々な面で助けていただいたハワイ観測所のみなさん、日本側で宿泊申し込み処理と会計の一切を取り仕切ってくださった秘書の仲家増美さんはじめこの活動を支援していただいた多くの方々へ心からお礼を申し上げます。

岡村定矩 (東京大学大学院理学系研究科)